

---

# 蝉時雨

NAO

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

蝉時雨

### 【コード】

N6600A

### 【作者名】

NAO

### 【あらすじ】

それは夏真っ盛りの炎天下。蝉時雨の中で、私は叶わない恋をした

(前書き)

共同企画小説参加作品。テーマは「雨」です。企画に参加してください。先生方の作品は、雨小説、で検索していただくと、ご覧になれると思います。よろしくお願いします。

私の足元に、ボールが転がってくる。

私はそれを足の腹でコントロールすると、ゴール前に走りこもうとする彼に視線をくれる。彼は、ゴール前に猛スピードで飛び込んできた。顔を上げて彼を確認する。足元のボールがゴールラインギリギリまで接近したところで、私は大きく足を振り上げた。

大きなバツクスイング。

短いスカートが揺れ、私の髪が舞い上がる。風を切る音が耳の中をかき混ぜた。私が出せる最高のスピードで、右サイドラインを駆け上がり、そのままの勢いで彼にクロスボールを供給する。

ボールを受け取ったとき、一度だけ彼を見た。確認は、それだけで十分。一度見れば、彼がどんなボールを要求しているのか、どんな動きをするのが手に取るように分かる。

私は振り上げた足を、ボールに叩きつけた。

ボールを擦り上げるようにして回転を加え、ゴールから離れていく軌道をイメージ。はやるイメージに遅れて、私の体が寸分の狂いなくイメージをトレースする。

きちんとボールをとらえれば、右足には何の衝撃も走らない。突き抜けるような爽快感が、クロスボールを上げた私の体を駆け抜けた。ボールは独楽のように美しい横回転をもって、彼に合流すべく綺麗な曲線を描く。ぐんぐんと曲がるそれは、やがて高く舞い上がる彼の胸に収まり、彼は体を無理に回転させた。バランスを崩した体勢のまま、彼は左足で地面に着地し、落ちてくるボールを右足で正確にとらえる。

彼の強烈なボレーシュートが、ゴールネットに突き刺さった。

その衝撃音に、蝉時雨がぴたりと止んだ。まるでアウエーの地でゴール決め、観客を黙らせたときのよう。

ネットを突き破らんばかりに飛び込んだボールが、反動でゴール

から抜け出てきた。彼はそれを器用につま先で浮かすと、そのボールを浮かせたまま、私に蹴ってよこす。

「もう一本頼む」

私は学校の制服が汚れるのも構わずに胸でトラップし、足の裏でボールを止める。

「いいよ。その代わりに、後で飲み物くらいおごってよ?」

「了解」

彼は汗をユニフォームの袖で拭くと、ゴール前から遠ざかっていく。汗を吸い込んだ髪の毛が、まるでワックスで固めた髪の毛のように見える。その毛先を伝って落ちた汗の雫は、太陽に反射してきらめき、地面の砂に吸い込まれる。

にわか雨にふられたように濡れた彼のユニフォーム。彼のたくましい胸板に張り付いているから、筋肉のラインがはつきりと見え、それが私をドキドキさせる。筋骨隆々というわけではないけれど、引き締まっていて無駄がない。

「美樹、今度は低くて速いやツな。ニアサイドに頼む」

彼が手をあげて私に指示を出す。

「いいけど、さっきの何よ。ゴール前であんなに簡単にトラップできるわけじゃない。コースは完璧だったんだから、ダイレクトでヘディングすべきところでしょ?」

彼は走り出そうとするのを止めて、腰に手を当てる。

「あまりにいいコースにボールが来るからさ、つい」

「練習なんだから、もっとまじめにやってよ……」

彼は頬を膨らます私に苦笑いをしているが、次の瞬間には顔を引き締める。

「次は本気。真面目にやる。それでラスト」

「……分かった」

私は渋々うなづいて、走り始めた彼にボールを蹴りだす。彼は、まるで手品のようにボールを軽々とトラップして見せ、並走する私にロングボールを上げる。ボールが太陽と重なって、やがてそれは

私の数メートル先に舞い降りる。

ロングボールが私に向かってくる様子は、本当に時が止まったかのように。蝉のけたたましい鳴き声や、ボールが弾む音、風を切って走る音、地面を蹴る音が、全て消えてなくなる。

真空。

私と彼は、グラウンドという名の宇宙にいる。

まさに無音の境地。

そこには二人だけが共有できる空間が広がり、二人だけが心を通わせることができる。繰り返されるパス交換は、そんな二人の会話そのもの。お互いを思いやり、お互いを支えあい、お互いを引き出しあう。私にはそれが分かる。彼は、私が追いつきやすいようにボールに逆回転を加えてくれ、その心遣いを感じるたびに、私も彼に最高のボールを渡したくなる。短いスカートが翻るのも気にせず、私は最高速度で駆け抜ける。シャツが気持ち悪いくらい体に張り付いて、下着の色が見えてしまっても、早起きして丁寧にセットした髪の毛が乱れても、化粧が落ちてしまっても、私は構わない。彼が出したボールをしっかりと受け取ることさえできれば、それは瑣末事に変わる。

だから私はがむしゃらに彼のボールを追いかける。

腕を振って、足を伸ばす。

もう少し、もう少しで追いつける。

「美樹！ 悪い！」

彼の大声は、ボールを受け取ることでできなかった私に向けられた。あと数センチで届くはずだった。

「大丈夫か？」

彼が転んだ私に駆け寄ってくる。左足が擦りむいていて、血がにじんでいた。汗を吸い込んだ純白のシャツ。その白に付着した砂埃は、まるで餅に付いた黄な粉。

「ごめん、追いつけなかった……」

「いや、あれは俺のせいだ。美樹がそんな顔する必要ない」

差し伸べられた手を取ると、彼の太い腕が、軽々と私を持ち上げる。私は擦りむいた足の痛みも忘れて、顔が茹で上がってしまう。私は眼前に迫る彼の胸に飛び込んで、甘えたくなる衝動を抑えるのがやっと。

彼はそんな私を心配してくれて、手を引いて水飲み場まで連れて行ってくれた。

「ごめんな、俺が調子に乗ったばかりに」

「気にしないでよ。私だって、サッカーやっている以上、怪我を忘れていたわけではないから」

水道の蛇口をひねると、宝石のように輝く透明な水道水が、私の左足をなめていく。膝をなぞり、つま先へ。ほてった私の体を足元から冷やしていく。

さつきまで全速力で走り回っていたとは思えないくらい、静寂な空間が水飲み場に出来上がる。

蝉の鳴き声が遠ざかっていった。

「勇二はさ……」

傷口を水道水で洗淨する私の隣で、彼が水道水を頭からかぶっている。隣の蛇口を目いっぱい開いて、後頭部から水を浴びるその姿は、砂漠に見つけたオアシスに飛び込んでいくよう。勇二は、好き放題水を浴びた後、前髪から水滴をたらしたまま、口いっぱい水を飲み込んでいく。喉仏を元氣よく上下させながら飲み込んでいく様に、私はまた体温が上昇していくのを感じた。太陽に焼けた健康的な肌、特に首元に釘付けになってしまった。

ふと、彼の首筋の味を知りたくなった。

「ん？ なんだ？」

私は自分から問いかけていたことを忘れて、体を震わせた。勘付かれたかな、と思い首をすくめる。彼はそんな私の痴態に微笑む。

「美樹が男だったら良かったのにな」

彼は水道水で濡れた口元を拭って、私に笑いかけた。

「そうしたら、絶対にいいサイドハーフになれる。俺だって、もっ

ともつと得点できる気がする」

私は針に刺されたような痛みには耐えながら、彼の胸を小突く。引き締まった彼の胸の感触が、小突いた手から伝わってきた。

「嘘じゃないぞ。県内でも……いや、全国でも、あんなに完璧なボールを蹴れる人間はいない。俺が保障する」

「ありがと。自慢にするわ」

彼は私が信じていないかと思っっているようで、少しむきになって私の手をつかむ。

「本当だって。美樹のボールじゃないとしつくり来ないんだ。それに……俺の動きを肌で感じて出してくれるやつなんて、他にはいないだから、これからも練習に付き合っただけいいんだ」

彼の感情が、つかまれた私の手から流入してくる。温かくて、それでいてたくましくて、一途で……。

「あのね、私、女なんだ。だから、いつまでも勇二のそばでボールを蹴ってられないの」

勇二が私を最高の練習相手として見てくれているのは分かる。

素直に嬉しい。

でも、私が勇二の動きを感じてパスを出せるのは、勇二を知ろうという強い思いが故。パスのタイミングだって、角度だって、高さだって、回転だってそう。全て勇二を知ろうとして、努力した結果に得られたもの。分かりたい、分かり合いたい、分かって欲しい。その積み重ねが、今の私の全て。

ボールの放物線が、きちんと勇二に届いて欲しい。

私の想いの放物線が、きちんと勇二に届いて欲しい。

それだけなんだよ。

「私だって人並みの女の子なんだから、おしゃれして、友達と遊んで、恋愛もしたいの。だから、いつまでもサッカー馬鹿に付き合っでいられないの、分かった？」

それでも私はこの想いを打ち明けることができない。私のパスはあんなに素直に勇二に届くのに、私の思いはちつとも勇二に届かな

い。勇二は私のパスを感じて、あれだけ上手に受け取ってくれるのに、想いはちつとも感じてくれない。

「だから、今だけ付き合っただけあげる」

身勝手な私。不器用な私。

「……悪かったよ。でも、ありがとな」

「別に、私サッカー好きだし」

勇二が好きだから、サッカーが好きだと言っただけで済んだ。でも、勇二は私が好きだからサッカーが好きなのではない。もちろん、サッカーが好きだからといって、私が好きだという保証もない。恋愛に保証はないから。

「美樹が男で、俺と同じサッカー部だったら……きっと最高のパートナーだな」

蛇口の水を止めて、傷口に絆創膏を貼る私を見下ろしながら、勇二は青空を仰ぐ。

一陣の風が駆け抜けると、グラウンドの周囲に生えた木々と、私の心がざわめく。

「……馬鹿」

リフティングを始めた勇二のボールをカットして、私はドリブルを開始する。絶対に彼にボールは取らせない。私は一定のリズムでボールにタッチしながらスピードに乗った。

「美樹！ 見えてるぞ！」

勇二が片手でメガホンを作りながら、私の後ろを走ってくる。

「見えてるんじゃないの！ 見せてるの！」

「ば、馬鹿……！」

勇二の日に焼けた褐色の肌が、真っ赤に染まるのが見えた。

私はドリブルしたままグラウンドに入る。勇二はそんな私を、俊足を飛ばして追い抜くと、ペナルティエリア前で立ちふさがった。私は一度ボールを止めて、彼と対峙する。勇二は少し体勢を低くして、私の動向をうかがう。

右、それとも左。

私は右足でボールをまたいでフェイントを入れる。勇二の体重が左足にかかるのが理解できた。極端な体重移動は、絶対的な隙といえる。私はわずかに開いた股の間を見逃さなかった。ボールを勇二の股の間に通して、私自身も勇二の横を駆け抜ける。

「……っ、くそ！」

股を抜かれる屈辱を味わっているのだろう。勇二が舌打ちをする音が聞こえた。

今のは、私の純粋な気持ちに気がつかない罰。

私は思わずほころんでしまう。

ゴール前は無人。二人だけの練習だから、それは当たり前。

だから私はある賭けをすることにした。

シュートが決まれば私は勇二に告白する。

シュートが外れれば、勇二のことはあきらめる。

勇二はすぐに私に追いついて、体重をかけてくる。女だからって容赦はしていない。これは一対一、女も男も関係のない勝負。私は体勢を乱しながらも、大きなバックスイングをとる。

最高の力で、最高のシュートを。

蝉時雨の午後、思いの丈をボールに込めて。

私はシュートを放った。

【END】

(後書き)

興味を持ってくださった方、読んでくださった方ありがとうございます。ここまで読んでくださった方は、ある疑問が浮かぶと思います。テーマが「雨」にもかかわらず、雨が出てこない!! … 申し訳ありません。蝉時雨という言葉で誤魔化しました。そんな作者ですが、これからもよろしくお願いします。評価、感想、栄養になります。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6600a/>

---

蝉時雨

2009年2月28日06時45分発行